

## 新しいFDの試み

### —「全学共通教育の平成16年度実施に向けた研修会」報告—

大学教育開発センター調査研究部

早	川	茂
村	山	聡
松	井	康
大	野	拓
板	野	俊
岡	本	研
合	谷	祥
安	井	修
稲	永	由
		紀

#### はじめに

本稿は、初めての試みである「全学共通教育の平成16年度に実施に向けた研修会」（以下、「研修会」）を大学教育開発センターが2003（平成15）年度に実施した、報告である。

大学教育開発センターが全学共通教育の企画・実施をおこなうようになったのは、センターが学内措置で設置された2002（平成14）年度からである。以後、共通教育部で企画・実施をおこなう傍ら、調査研究部においては2003（平成15）年3月に「香川大学全学共通教育平成16年度カリキュラム改善をめざして」と題した提言を出すなど、その改善に対する議論が進められていた。

そうした中、全学共通教育のカリキュラムとしての体系性を確保するためには、授業を担当する教員が個々バラバラに授業を担当するのではなく、科目担当者間で情報交換・意思疎通を図りながら授業を担当してもらう必要がある、という議論がなされた。そこで、翌年度分シラバス作成の1ヶ月前に、翌年度の担当者に集まってもらうため、こうした場を設けることとなった。これは、本学初の試みである。

本報告では、この「研修会」に関する一連の過程をまとめ、当日参加しなかった教員に対しても情報の共有を図ると共に、今後FDプログラムを展開させる上での材料となるようにした。

#### 1. 概 要

「研修会」は、シラバス提出締切（12/19）の約1ヶ月前となる11月26日に開催した。出席者は150名で、出席率は翌年度担当者の60.5%であった。前半で共通教育担当者用のガイダンスを講義形式でおこない、後半を各科目種別に分かれたワークショップとした。前半のガイダンスは、

全学共通教育の意義や仕組み、事務の手続きや施設利用など、全学共通教育担当者全員に必要な事柄について理解を深めてもらうために設定した。これを受けて、各科目種別に部屋を移動し、「シラバスの書き方」という共通課題を設定したワークショップを開催した。その後、各ワークショップで出された議論内容の共有のための時間を設けた。目的等詳細は表1の通りである。

表1 「研修会」概要

1. 目的
① 「香川大学の教育」を共に担当する教員として教育方針の共通理解をはかる。
② 教職員交流の場を提供する。
③ 香川大学の一教員としての自覚を促し、本学教育の充実を図る。
2. 日時・集合場所
日 時： 2003年11月26日（水） 15:00-18:00
集合場所： 教育学部3号館1階 314講義室
3. 対象
2004年度全学共通教育担当予定者（含：夜間主担当）
* 外国語非常勤講師については、別日程で実施。
4. 内容
15:00-15:05 開会の挨拶
15:05-16:00
【第1部】 全体説明：教育方針説明および事務的ガイダンス（1時間：講義形式）
－教育方針説明：本学全体の教育方針、全学共通教育の教育方針の説明
－事務的ガイダンス：教育活動実施に関わる担当事務および内容の説明
－学生の自学自習に向けた取組紹介：Net Academy 国内利用動向
16:00-16:05 休憩・移動
16:05-17:35
【第2部】 各科目単位でのガイダンス（1.5時間：ワークショップ形式）
－編成：主題、共通、教養ゼミ、外国語、健康・スポーツ の5部会
－内容：① ガイダンス：各科目内での教育目標確認、シラバスの書き方
② 交流：前学期の反省と今後の課題に関する討論
17:35-17:40 休憩・移動
17:40-18:00
【第3部】 総括（20分）

## 1. 事前準備

「研修会」に先立ち、いくつかの事前準備を行った。これらの資料作成は、共通教育実施を全学として取り組んでいくための仕掛けともなっている。

### 1-1 「モデルシラバス」作成

調査研究部では、開催3ヶ月前から「モデルシラバス」の議論を行った。まず、主題科目、共通科目、教養ゼミナールの3科目について各委員にモデルシラバス案を作成してもらい、全学共通教育に関してシラバスの統一性を持たせるためにどのような情報が必要でどのような書き方が望ましいか、に関して議論を重ねた。特に、10月に統合した旧香川医科大学（現香川大学医学部）でのシラバスと本学でのシラバスの内容が非常に異なっていたこともあり、時に異文化理解の様相を呈しながら調整を重ねた。その議論を元に各委員がそれぞれ作成した案を修正し、それを集約したものを当日配布した。この「モデルシラバス」を「研修会」後半のワークショップの資料とし、最低限全学共通教育シラバスとして必要なガイドラインを示すと同時に、それをたたき台にして各科目のあり方を議論してもらうことにした。

### 1-2 「全学共通科目 授業担当教員ハンドブック」作成

「モデルシラバス」とは別に、センター教員ならびに教養教育事務担当者が中心となり『全学共通科目授業担当教員ハンドブック』をまとめ上げた。全学協力体制移行後、各学部と担当事務や教室・機材等が異なっているにもかかわらず、担当にあたっての基本的な事項に関してまとめられたものはこれまでなく、教員にとって不便であり、担当職員にとっても複数の教員からの同じ初歩的な質問に何度も対応しなければならないなど、非効率的であった。そこで、8月から、すでに他大学において発刊されている類似のハンドブックを参考にしながら、収めるべき情報の集約と精選をおこない、できる限り見やすいようにまとめ、「研修会」前半の資料として配付した。内容は、全学共通教育の企画・実施の仕組み、概要、授業実施およびその前後の諸手続のながれ、機材・設備の説明などとなっている。

ただし、統合ならびに独立法人化の関係もあり、この時点で次年度の授業日程や学年暦などが決定していなかったため、当日は暫定版を作成して配布せざるを得なかった。正式版は授業開始前に配布されることになっている。

### 1-3 シラバス提出等事務書類の準備

これまでシラバスの提出に際しては、教員個別に依頼状を教養教育事務室（現 修学支援室）から送り、個別に回収をしていた。だが、「研修会」が開催されるのを機に、「研修会」当日にシラバスの依頼を行うこととなった。そのため、シラバス依頼書類についても「研修会」前に修学支援室で作成・準備をおこなった。

### 1-4 出欠票

「研修会」には全学共通教育科目担当教員全員に出席してもらうため、最終的には学長名で開催を通知した。その後、出欠票をファックスで返信してもらったが、欠席予定教員には

その理由を書いてもらうことにした。

### 1-5 コーディネーター事前打合

後半のワークショップでは、主題科目、共通科目、教養ゼミナールでは調査研究部委員が、外国語科目ならびに健康・スポーツ科目については各科目部会長がコーディネーター役をつとめた。その際、各担当コーディネーターはワークショップの進行を実りのあるものとするために、進行について事前に打合せを行った。

## 2. 当 日

当日は、事前にコーディネーターおよび関係者用に配布された細かい進行表にしたがって、すすめられた。全体司会は早川調査研究部長が担当した。

まず、センター長より「研修会」開催の意義を含めた挨拶があった。その後、武重共通教育部長から、全学共通教育の概要、意義、そして全学共通教育担当者に望むこと等、全学共通教育に関する基本的な話があった。さらに、塩田教養教育担当専門職員（修学支援室）から、事前に作成したハンドブックを参照しながら、全学共通教育実施の流れ、備品、各種届等、事務的な事項について話があった。そして、本学においては特に学生の自学自習をどう進めるかということが課題になっていたことから、その取り組みの一例として、アルク教育社の川村氏より、本学にも導入されている英語自学自習システム「アルクネットアカデミー」の他大学での活用事例ならびに、就職等においてTOEIC等で英語力を重視する企業が多くなっていることなどが紹介された。

その後休憩を挟み、後半は担当科目毎に教室を移動し、各科目コーディネーターの元で分科会を開催した。次節に示すとおり、各分科会では活発な議論が行われ、全学共通科目の意義そのものについて合意形成を試みる分科会もあれば、シラバスの統一や科目全体として何かの合意を得るといった分科会もあった。

そうした議論で得られた事柄を共有するために、分科会の後にもう一度最初の会場へあつまってもらい、各科目のコーディネーター代表が5分ずつ総括発表をおこなった。その総括発表を受けて、最後に竹内センター長が総評を行った。

なお、事後アンケートを取り、今回の内容や今後の要望について意見聴取をした。

## 3. 分科会報告

ここで第2部の分科会で話し合われた内容については、詳細を報告することにした。なぜなら、分科会で行われた議論の内容を、参加者だけでなく、全学的にも共有しておく必要があるからである。

内容については、各コーディネーターのなかに記録作成者を1名置き、締め切りを開催1週間後にして即座にまとめていただいた。なお、表題のカッコの中はコーディネーター名、名前の前に○がついているのがリーダー、△がついているのが記録作成者である。

### 3-1 主題科目（○村山、早川、武重、△岡本、稲永）

主題科目ワークショップにおける参加者は約40名で、村山聡（教育学部）、早川茂（大学教育開発センター調査研究部長、農学部）、武重雅文（大学教育開発センター共通教育部長、教育学部）、稲永由紀（大学教育開発センター）および岡本研正（書記）がコーディネーターを務めた。まず始めに司会役の村山および早川から主題科目についての意義、今日の教養教育が一般教育と呼ばれていた時代からの歴史的変遷、従来の主題Ⅰ「人間とテクネー」、主題Ⅱ「歴史と現代」、主題Ⅲ「地域と環境」に加えて主題Ⅳ「生命と医療」が来年度から設けられたことなどについて説明がなされ討論が始まった。

討論の口火を切ったのは医学部からの参加者であった。彼の発言は、合併前の旧香川大学と香川医科大学との間で教養教育とくに主題科目に関する合意がきちりなされ共通認識となっているのかどうかといった質問であった。これを皮切りに医学部からの複数の出席者から、共通教育の講義が行われるのは幸町キャンパスに限られるのか、主題科目においてどの主題をどの学部生が受けるのかといった、こんな簡単なシラバスでよいのかなどのきわめて素朴かつ基本的な質問や問題指摘が相次いだ。こうした発言の裏には、香川医科大学の教員に対して、旧香川大学において従来行われてきた教養教育に関する教育システムやカリキュラムや合併後の新体制ではそれに合流するという全学的レベルでの説明や学内合意がなされていないという不満が込められているように思われた。質問に対しては旧香川大学側でありコーディネーターでもある早川や武重が回答するという形となった。

発言はほとんど医学部関係者からなされ、具体的回答を求めようとする切実な雰囲気から旧香川大学関係者は発言するきっかけもないほどであった。医学部関係者側から様々な疑問や意見が出るのではないかという予測は勿論我々コーディネーター側にはあった。だが、主題科目の意義や内容に関する医学部関係者の理解や認識は我々の予想以上に不十分であったことがわかった。これは旧香川大学と香川医科大学の統合にともなう学務上とくに教養教育カリキュラムの調整にかかわる討議やすり合わせの時間が十分でなかったことによるものであろう。とりわけ少学生数で教養教育をも含め専門性を重視した教育を行ってきた香川医科大学の教員にとり、新香川大学における主題科目に対する戸惑いや不安は相当なものであることがわかった。主題科目に関する全体的討論の後、主題Ⅰ～主題Ⅳのグループ（各グループ8～12名）に分かれ、グループごとに各主題に関する討論が行われた。今回の主題科目に関するワークショップは非常に緊張感を持ったものであり、参加者の熱意が感じられるものであった。医学部関係者が提起した様々な疑問や問題は、彼らのみならず旧香川大学関係者にとっても共通のものであることを指摘しておきたい。

### 3-2 共通科目（○合谷、△大野、松井）

#### 3-2-1 概要

第1部のオリエンテーションに引き続き、場所を教育学部312講義室に移動し、16年度共通科目担当者を中心に34名の教員が「共通科目とは何か」、「シラバスのあり方、書き方」を中心に意見交換を行った。討論は司会（合谷）が、準備した資料を基に説明、問題提起を行い、参加者が意見交換を行う形態で行われた。

## 3-2-2 討論の要旨

## (1) 共通科目とは何か

司会から修学案内に記述されている共通科目の意義が再度紹介され、コーディネーターでまとめた以下2点の共通科目の特徴が紹介された。共通科目は「教養科目としての意義を持つ科目群」と学部によりその位置づけに差異があるが、「専門教育の導入科目としての役割を持つ科目群」に分類できるのではないか。科目領域教員集団により、講義内容について議論を深めることが可能であり、科目によっては担当者が替わっても同じ内容にすることが可能ではないか。

意見交換においては、各自の科目領域における現状が報告され、科目領域教員集団が十分には機能していない現状、領域によっては授業内容を同じにできないこと、などが確認された。また、高等学校の授業内容と連携した授業（そこには補習的授業も含まれる）や主題科目と関連づけた履修指導の必要性、なども指摘された。

## (2) シラバスのあり方、書き方

司会から、調査研究部でまとめた以下のシラバスにおける変更の提案が紹介された。

①到達目標の設定、②学習の方法を盛り込む、③多元的成績評価と配点比率の明記、④オフィスアワー等の明記、⑤15回分の授業計画を記述すること、⑥授業内容がわかるように、キーワード、説明文を加えること。

意見交換においては、シラバスのあり方が先ず、問題となった。現状では全ての授業に関する情報がかさばる冊子の形で提供されており、そのことが学生の利用を阻害している面があるので、これを改善していく必要性が確認された。

シラバスの内容に関しても種々の意見が出された。

- ・「教科書・指定図書・参考書」欄は他の項目と区別したほうがよい。
- ・単位認定における出席点の取扱いについて、JABEEとの関連から、単に出席したら点を与えるというのでは問題ではないか。
- ・学生に自学自習の重要性を理解させる必要がある。

また、到達目標の設定と多元的成績評価に関しては次のような意見があった。

- ・到達目標を高く置くことは簡単ではあるが、(特に教養教育においては)「学生による授業評価」などから受講生のレベルに応じた授業も要求されており、受講学生のレベルのばらつきを考えると目標設定に苦慮する。
- ・多元的成績評価の重要性は理解できるが、人文社会系の多人数講義においては小テストを行うにしても大変であり、何か良い方策がないか苦慮している。

特に、人文社会系の多人数講義については、受講生数の適正規模を目指すことが必要である、修学支援室に用意されているマークシート形式でミニレポートも記述できる出席カードの利用等の提案があった。また、コーディネーターからも多元的成績評価とは学生の学習プロセスを重視した成績評価だと思ふとの追加説明がなされた。

(3) その他

授業のため、教員がキャンパス間を移動する際に発生した事故の取扱いに関するルールの早期検討を求める意見があった。

3-2-3 まとめ

① 共通科目とは何か

共通科目の意義を明確にし、授業内容を充実するためには、現状では十分機能していない科目領域教員集団を活性化することの重要性が確認された。

② シラバスのあり方、書き方

今回の研修会の中心テーマは「シラバスの書き方」であったが、シラバスのあり方(利用方)を今後、検討していく必要がある。今回行われたシラバスの改善に関しては、受講者数や受講者のレベルのばらつきに起因する問題点、記述の困難性が指摘されたが、調査研究部の提示した案は大筋で理解された。

3-3 教養ゼミナール (○△安井、△板野)

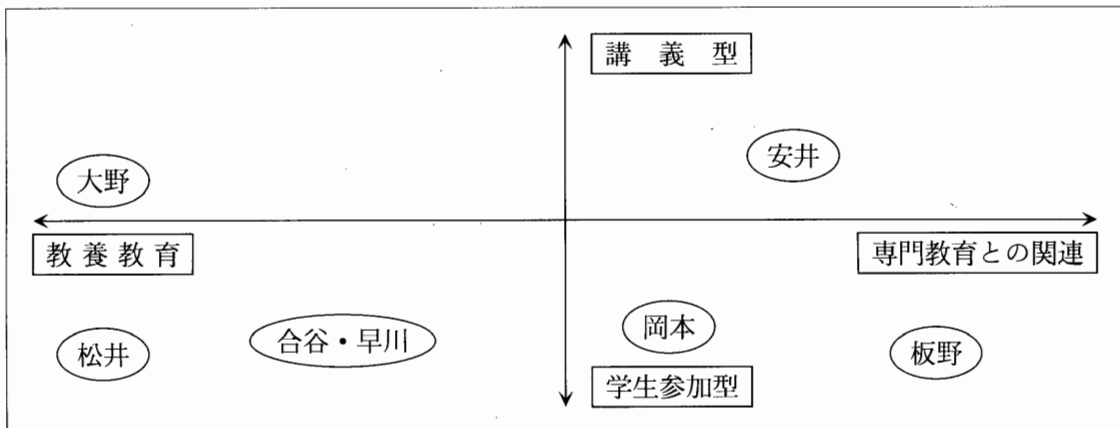
I. 教養ゼミの目的・目標 モデルケースの説明

まず、自己紹介をしていただき、その後、安井の方から調査研究部で議論してきたことを紹介した。

教養ゼミの二つの軸から説明した(下図参照)。

横軸の〈教養教育重視か、専門教育との関係重視か〉といっても、それだけでは教養教育とは何かという哲学論になってしまう。そこで、ここでは、自分の学部生だけを対象とするのか、全学の学生を対象とするのかの違いとした。この横軸の問題はあまり議論が進展しなかったが、安井から一つの提案をしておいた。すなわち、いまのところ、工学部・農学部・医学部は、教養ゼミを幸町キャンパスでは開講しない。そうすると、ほとんどが自学部の学生になってしまう。そこで、工学部・農学部・医学部それぞれから1科目でも幸町キャンパスで開講してもらえば、教養ゼミの意味が生きてくるのではないだろうか。来年度は無理であるが、将来の課題として是非考えていただきたい、と。

教養ゼミのモデルシラバス



縦軸は、講義型と学生参加型に分けた。教養ゼミの特徴は学生参加型にあるのであって、学生自身が問題発見→問題解決→意見発表を教官の指導の下に（双方向教育）どう実現するかという点にある。そして、学生の自己学習が大事であるとして、それを徹底したやり方を実践しているのが、医学部の「チュートリアル教育」である。

## II. 医学部のチュートリアル教育について

香川医大で試行されたチュートリアル教育の中で、比較的よい評価を得た「課題2 飲み過ぎに注意」の例を板野が説明をした。その一部を要約すると、

### 第1週（75分、2コマ）

ここでは6名単位のグループを構成する。その席で自己紹介、役割分担の決定後、チューターより課題シート1が渡され、グループディスカッションにより、課題に含まれる問題点、疑問点の抽出が行われる。その疑問点を解決するためにはどのように自己学習すればよいかを討論する。次回までに問題点解決のために、図書館にある教科書、コンピューター、指定されたリソースパーソンを通じて自学自習する。

### 第2週（75分、2コマ）

ここでは、それぞれが学習してきた内容をグループ内で発表し、ディスカッションする。また、新たな疑問点の抽出を行う。チューターは課題シート2を提示し、前回同様に自学自習する。

### 第3週（75分、2コマ）

1および2週で抽出した問題点の整理をし、自学自習した内容を発表できるようにオーバーヘッド等に準備し、発表する。

このような課題を3または4行う。

### 成績評価

成績評価は、評価表をもとにして、チュートリアル教育への参加の度合い、自学自習の方法の習熟度、発表における貢献、発表の実際で行う。

教養ゼミを計画していく上でのサンプルとなる考え、説明を行った。いくつかの質問が出たが、それについては、下のIVにまとめて示すこととする。

なお詳細については、「香川医科大学における『早期体験学習』の一貫としてのチュートリアル教育の導入と評価」を参照されたい。

## III. シラバスの書き方

書き方の技術的な諸問題を説明した。他の部会と同じであるので、ここでは省略する。

## IV. 質問と意見（【 】内の記述は、板野と安井が回答したものである）

1. チュートリアル教育では、知識の習得が到達目標ではなく、学ぶプロセスが重視されていることは（教師が過度に介入してはいけないということなどは）よく理解できた。では、学び方の指導というのには何か理想型でもあるのか、それを用意しているのか【チュートリアル教育では、極端な話、学生が最後に出してくる結論が正しいかが問題となる



わけではない。また、決まった指導のしかたがあるわけでもない。プロセスが大事だから、学生の学びにそくして指導するという以外にない。ただし、教養ゼミでチュートリアル教育を実践してほしいと言っているのではない。これも一つのやり方ということではいけないのであって、モデルシラバスに示した様に、多様なやり方があるということで理解していただきたい。】

2. 多様なやり方があるということはわかったが、それでも、教養ゼミとして最低限やるべきことを決めて（まずは、読み書きを教えるというのが教養ゼミの最初の趣旨だったのではないか）、ここだけはやってほしいということを決めたらどうか【今後の検討材料であると考える】

3. チュートリアル教育をやるという場合、いまの教養ゼミの定員の25名という多すぎる数が何か制約になることはないのか

【難しい問題であるが、TA制度で大学院生（医学部では助手）を活用していただければ、先生方の負担も多少軽減されるのではないか。】

4. 教養ゼミが目指すのが学生参加型の授業であるということはわかったが、では、成績判定では期末試験はゼロ配点でもよいのか

【成績判定は先生方に任されているが、当然期末試験は実施しないというケースはおおいにあり得ることである。】

5. 参加型ということで、出席回数が何回以上でなければ単位認定しないということはあるのか、その回数の目安はあるのか。多くのシラバスでは、学生のなかにグループを作って指導していくということになっているが、そうするとそのなかでも「さぼる」学生が出てくるのではないか

【出席回数をどう評価するか、さぼる学生にどう対応するかはすべて担当する先生に任されている。ただし、出席をどう評価するか、さぼる学生にどう対応するかということはシラバスにきちんと示しておいた方がよいのではないか。】

6. 各学部とも教養ゼミに類似した学生参加型の授業形態が増えている。その意味ではたとえば教育学部の必修制なども再検討の時期がきているのかもしれない

【各学部で検討していただきたいと考える。】

7. 学生参加型ということで、外に学生を連れて行って事故があった場合などをどう考えたらよいか

【調査研究部でも議論したが、いまのところ、入学時に入る保険等で対応するという以外にないのではないか。】

8. フィールドワークで学生を指導したいと考えているが、その時、土日に授業を実施するというようなことはできないか

【授業回数の確保ということで、全学的なテーマになっていることなので、この部会だけでは結論が出ないでしょうが……。】

#### 学生参加型の授業について、一応の結論

【学生が履修する全学共通科目の圧倒的な大部分は、主題・共通科目の講義型（知識習得型）のものであるから、教養ゼミのような授業では、できる限り学生参加型の授業形態を実現してほしい。】

その他の質問・意見

9. 抽選等で8回目の選択の結果としてまわってくる学生がいるが、こうしたことはなんとかならないか

【必修制にしている学部は優先しているが、そうでないところはどうしても後回しになる。開講コマ数を増やせば問題は解決するかもしれないが……。】

10. 指定図書制度はどうなっているか

【いまの図書館では指定図書が特別の棚にまとめて置いてあるわけではないし、先生が希望する冊数が確保できているわけではない。今後予算措置も含めて検討していく必要がある。】

### 3-4 外国語科目（○山田、○松島、△最上）

外国語科目のワークショップは、英語と初修外国語を担当する教官15名程が参加して行われた。前半は英語と初修外国語の担当教官が合同で、後半は英語と初修外国語の担当教官がそれぞれ別々の部屋に分かれ、前半の議論をさらに掘り下げる形で議論がなされた。議論の対象は、主に英語のモデルシラバスについてであった。これについては、まず以下のような説明がなされた。

#### ○英語のモデルシラバスについて

調査研究部から、英語のモデルシラバスの作成を依頼された。平成15年度のシラバスを参照し、200頁に及ぶ英語のシラバスから共通部分を抽出しようと考えたが、共通部分の抽出は極めて困難であると判断した。これまで各担当教官へ個別に依頼しており、多様な内容となっているので、抽出することはほとんど不可能だからである。周辺の大学の事例や初修外国語を参考に、シラバスモデルには1年次に履修する科目の共通テキスト化・共通シラバス化を図ることにした。非常勤講師の枠も厳しくなり、多様性ばかり考えるわけにもいかない事情もある。まず、香川大学で英語を勉強する目的を二つにしぼった。

- ① 「知識としての英語力」を「実践的コミュニケーション能力としての英語力」に転換
- ② 英語学習を通して、言語的多様性・文化的多様性を認め、他者・多文化を理解

中学・高校で学習してきたことを、実際に使えるものにすることが①で、総合英語、コミュニケーション・イングリッシュの授業で主に目指す。異文化間コミュニケーションの授業では②に重点を当てた授業をする。総合英語では、TOEICを利用するテキストを使用して授業を行い、TOEICの得点も到達目標に加えることにする。

このようなシラバスモデルの説明のあと、TOEICの得点を到達目標とすると、それに到達しない落ちこぼれた学生はどうするのかといった質疑応答などがなされた。それに対する回答は、TOEICの点数は努力目標に過ぎず、評価がまちまちと不満が多い現状を解消できるのではないかと、また将来、習熟度別クラス編成が求められるようになって、それに対応できるのではないかとというものであった。

初修外国語のシラバス案については、1年次の授業の共通テキスト化・共通シラバス化は、フランス語、中国語、ロシア語ではすでに導入済みであり、ドイツ語も文系学部の外国人教

師とのペア授業クラスでは導入済みであることから、到達目標をわかりやすく明示すること、ドイツ語の1年次に履修する科目のシラバスを理系学部も含めて共通化することを主な改正点とすることになった。

### 3-5 健康・スポーツ科目 (○△石川)

- 1) 健康スポーツ科目の意義について、現在の教養教育修学案内に記載してあるものを再検討することで議論を進めた。大綱化後に改訂された修学案内中の意義については、今でも十分に通用する内容であることが理解された。ただ、それ以外に学生の積極的な授業参加を促すような授業計画を立てることで、学生間のコミュニケーション能力の向上や、リーダーシップ・協調性の養成などを意義に含めるように改善してはどうかという意見がまとった。
- 2) 新しいシラバスの作成については、特に単位の認定方法のところ、これまで教官ごとにまちまちであった、授業出席の取り扱いを共通認識で行うことを確認した。出席は実技授業においては重要な評価基準ではあるが、その割合を70%にとどめ、残り30%を各教官の評価基準を用いて成績を出してもらうことで意見をまとめた。また、意義のところ、まとめた、「コミュニケーション能力の向上、リーダーシップ・協調性の養成」に関する記述をシラバスの授業の概要に盛り込むことにした。

最後に、健康スポーツ科目は「学生による授業評価」によれば比較的満足度の高い科目となっているが、大学教育における健康スポーツ科目の存在意義を全学の教官にアピールできるように常に授業改善を行っていくことを考えていかねばならないであろうという意見をまとめてワークショップを終了した。

## 5. 反省と課題

ワークショップ終了後の最初の調査研究部会議(12/10)において、反省会がおこなわれた。各分科会の記録と事後アンケートの結果を材料にしながら、議論をおこなった。

事後アンケートでの総合的な満足度を4段階で評価してもらった結果、「とても満足できた」「まあまあ満足できた」をあわせると68% (無回答を母数に含む)であった。今後の「研修会」の必要性についても、59% (同)が必要であると回答している。また「良かった点」と「悪かった点」について自由記述で尋ねると、同じ科目を持つ他学部の教員と話をすることができたことや、イントロダクションとしての意義を果たせていたことなどは良かったが、内容面においては改善を求める意見が多かった。指摘された点のほとんどは、次回の「研修会」の時に改良を加えることが可能であると感じた。

アンケートでも出てきていたことではあるが、今回は特に、全学共通教育に関する主題科目において、医学部教員との共通認識の問題が浮き彫りになった。この点については、その後のカリキュラム編成委員会でもしばしば問題になっており、その点で、センターとしては今後時間を掛けて合意形成を図る努力をしていく必要があることが確認された。また、特に共通科目と関わっ

て、共通科目の意義付けの不明確さや科目領域毎での話し合いの必要性がアンケートでも出されていた。科目の系統性等を考える上でも、全学の講師以上の教員がいずれかの科目領域に属しているということからも、科目領域教員会議は今後全学をあげて教育を充実させていくのに重要な機能を果たすと考えられる。故に、今後、科目領域教員会議を活性化させる方向へ動く必要があるのではないかということも確認された。

なお、アンケートの中には「強制的なやり方は止めて欲しい」という意見もあった。今回の試みを「強制」ととるか「職務」ととるか、これは意見が分かれることだろう。ただし、「非強制＝自発」という図式につながるならまだしも、「非強制＝無視」という形につながるのであれば、こうした「研修会」も意味を持ち得なくなる。そのことは考えておくべきであるように思われる。

## おわりに

いずれにしても、シラバス作成前の段階で「研修会」をおこなった意義は大きい。コーディネーターや事務職員他、さまざまな関係者が協力して、ようやくこうした新しい試みを走らせることができた。内容詳細に関しては検討が必要であるが、こうした場の設定とともに授業実施後のフォロー（たとえば授業評価データに基づいた反省会など）などを加えて、常に進化し続ける全学共通教育、そして大学教育全体を作り上げていくことが肝要であろう。